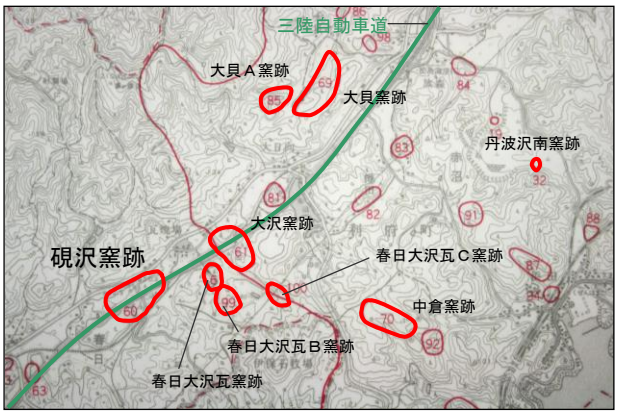
宮城県利府町

硯沢窯跡　発掘調査現地説明会 資料

平成 20 年 10 月 4 日(土)
午後１時～

【調査要項】

1　遺 跡 名：硯沢窯跡（すずりさわかまあと）
2　所 在 地：宮城県宮城郡利府町春日字硯沢
3　調査主体：利府町教育委員会
4　調査理由：三陸自動車道（仮称)春日ＰＡ設置工事
5　調査期間：平成 20 年５月 12 日～11 月末
6　調査面積：14,034 ㎡

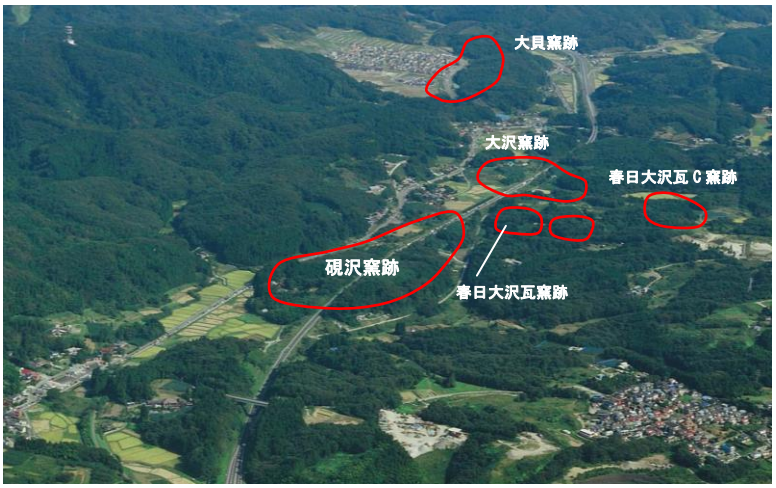


【硯沢窯跡（春日窯跡群）の位置】

◆はじめに

硯沢窯跡は、利府町春日・赤沼の広大な範囲に及ぶ春日窯跡群の西端に位置しています。昭和 60 年には、三陸自動車道建設工事に伴い発掘調査が実施されており、奈良時代（８世紀前半（多賀城創建期））の須恵器窯跡 16基、平安時代（９世紀後半（多賀城Ⅳ期））の瓦窯跡４基、同じく平安時代の炭窯跡５基、工房跡（作業場）７軒などが検出されています。

今回、三陸自動車道（仮称）春日ＰＡ設置工事に伴い、当該遺跡が開発計画地内に位置することから発掘調査を実施しています。調査区は三陸自動車道を挟み、南北２箇所に分かれており、昭和 60 年に須恵器窯跡が検出された地点からは西側に約 200m離れています。



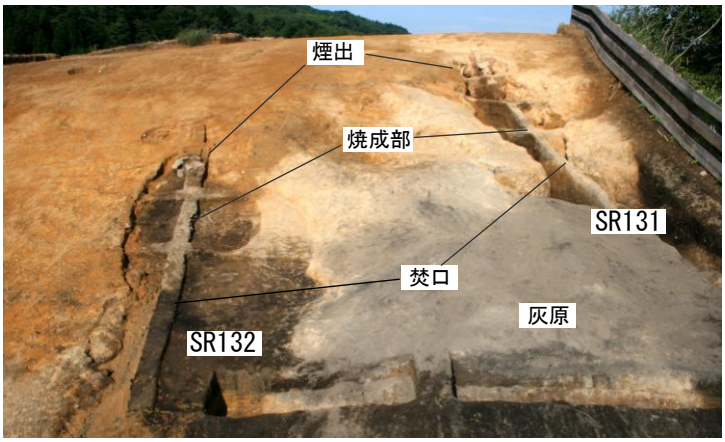
□春日窯跡群は、硯沢窯跡の他、大沢窯跡・大貝窯跡・中倉窯跡などによって構成されており、東西約 2.7km・南北 2.1km の広大な範囲に及びます。窯跡群の西端に位置する硯沢窯跡の南西約５km には古代陸奥国府多賀城があります。

◆発見された遺構

（１）奈良時代（８世紀前半（多賀城創建期））の須恵器窯跡２基が検出されました。（調査区北）

【ＳＲ１３１・１３２】

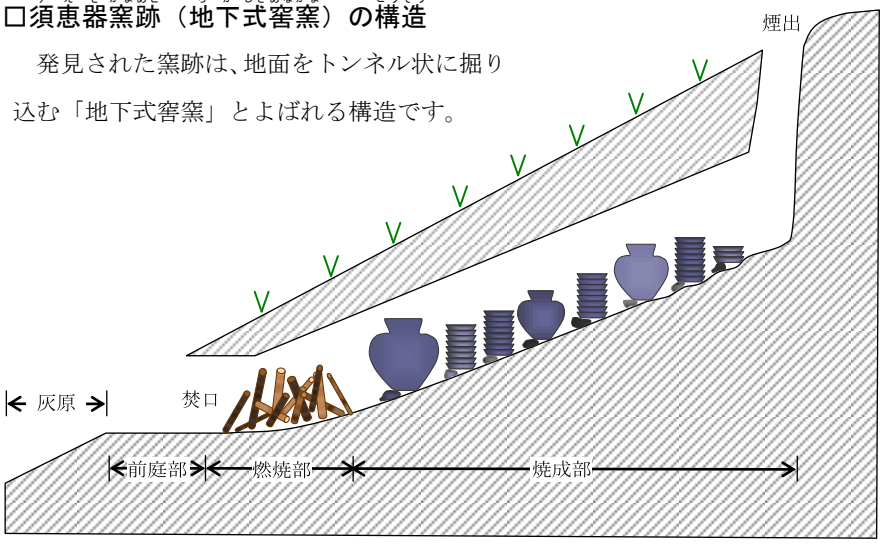
丘陵頂部付近の西斜面に２基並んで、非常に残りの良い状態で見つかりました。窯の構造は２基とも地面をトンネル状に掘り込む地下式の窖窯といわれるものです。製品を並べた焼成部と燃焼部の床面には傾斜があります。床面・壁面ともに固く焼け締まっており、窯の中は非常に高温に達していたことがわかります。煙出施設は焼成部の奥壁にあります。煙出付近の堆積土からは石がまとまって見つかっており、窯操業の最終段階に煙出を閉塞するために用いられた可能性が考えられます。



煙　出：窯の奥にあり煙を外に出すところ
焼成部：製品を並べ、焼くところ
燃焼部：燃料をくべるところ
前庭部：製品の出し入れなど作業をするところ
灰　原：掻き出した炭とともに失敗した製品を捨てたところ

□須恵器窯跡（地下式窖窯）の構造

発見された窯跡は、地面をトンネル状に掘り込む「地下式窖窯」とよばれる構造です。



須恵器窯操業の様子（絵：岩根）

窯を構築するには適度な斜面が必要であり、窯は丘陵斜面に造られます。地形や傾斜だけではなく、風向きや土質も窯を造る重要な要素になります。また、燃料である木材が近くにあることも必要です。

□失敗した製品の捨て場である灰原からは坏・高台付坏・双耳付坏・高坏・蓋・甕・壺・円面硯など多数の須恵器が出土しています。**須恵器は古代陸奥国府多賀城を中心に運ばれました。**

【灰原から出土した須恵器】

※須恵器：窯を用いて高温で焼かれた硬質の土器

「宮城」

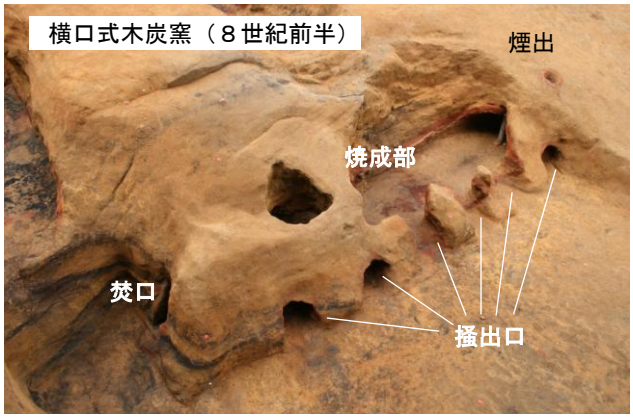
「宮木」

□出土した須恵器の中には「宮城」「宮木」と刻書されたものも含まれています。

（２）県内初となる横口式木炭窯を発見。（調査区南）

奈良・平安時代の炭窯跡が６基見つかりました。見つかった窯の形態は、４基が斜面の傾斜に沿って、斜面の上方に向けてトンネル状に掘り込む地下式木炭窯であり、２基が横口式木炭窯です。横口式木炭窯はこれまで県内において確認された例はなく、県内初の調査例となりました。年代は出土遺物から８世紀前半頃と考えられます。

【地下式木炭窯（10 世紀）】



□横口式木炭窯の構造

斜面の等高線に対して平行に造られます。焚口と煙出は反対側にあり、中央に位置する焼成部には複数の掻出口が付きます。そのため、通称「八つ目ウナギ」ともいわれています。掻出口からは炭の出し入れをしました。

「八つ目うなぎ」君

（３）その他の遺構

①焼成土壙（調査区南・北）

調査区に点在するように確認されました。壁が強く焼けているものが多く、床面には炭化物が堆積していました。簡易的に木炭を焼成した施設と思われます。

②縄文時代の遺物（調査区北）

北側の調査区東側において縄文時代前期（今から約 8､000 年前）の土器・石器を含む層が見つかっています。当時、近くに縄文時代の人々が生活していたものと思われます。

◆まとめ

今回の調査成果をうけ、これまで硯沢窯跡で発見された遺構の数は、奈良時代（８世紀前半）の須恵器窯跡 18基・炭窯跡３基、平安時代（９世紀後半）の瓦窯跡４基、同じく平安時代（９世紀～10 世紀）の炭窯跡６基となりました。

特に注目されることは、８世紀前半における須恵器・木炭生産です。８世紀前半は、中央政権における東北支配が活性化された時期です。そのため、多賀城は古代陸奥国府として東北支配・開発のための軍事・行政の拠点として設置されました。今回の調査において、**硯沢窯跡が創建期の多賀城を支えた重要な生産拠点であった**ことを改めて確認できました。

また、これまで他の遺跡で発見されている木炭窯は製鉄炉跡とセットで見つかっていることが多く、木炭窯で製造された木炭は製鉄に使用されたものと思われます。そのため、今後の調査によっては、近くから製鉄関連遺構が検出されることが予想されます。

大沢窯跡・大貝窯跡などの周辺の窯跡では、多賀城Ⅲ期・Ⅳ期の須恵器・瓦窯跡・炭窯跡が多数見つかっており、**春日窯跡群は国府多賀城を中心とする当時の都市域に須恵器や瓦・炭・鉄などを供給する「生産の場」であったといえます。**

須恵器窯跡調査風景
調査範囲と周辺の様子
焼成土壙
焼成土壙
調査区北
縄文土器出土調査区
現場事務所
調査区南
地下式木炭窯
横口式木炭窯
炭窯跡
炭窯跡
焼成土壙
主要地方道 仙台松島線
0 20m
須恵器窯跡
炭窯跡
縄文土器出土範囲
焼成遺構・土壙

【硯沢窯跡　遺構配置図】